

2014 年度点検・評価シート

I 評価項目・担当部局

対象部局	環境創造学部環境創造学科 Faculty of Social- Human Environmentology
評価基準 5	学生の受け入れ 【自己評定 A】
点検・評価項目(1)	5-1 学生の受け入れ方針を明示しているか。
評価の視点	求める学生像の明示
	当該課程に入学するにあたり、修得しておくべき知識等の内容・水準の明示
	障がいのある学生の受け入れ方針
点検・評価項目(2)	5-2 学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に学生募集および入学選抜を行っているか。
評価の視点	学生募集方法、入学選抜方法の適切性
	入学選抜において透明性を確保するための措置の適切性
点検・評価項目(3)	5-3 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。
評価の視点	収容定員に対する在籍学生数比率の適切性
	定員に対する在籍学生数の過剰・未充足に関する対応
点検・評価項目(4)	5-4 学生募集および入学選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。
評価の視点	責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

II 【点検・評価項目ごとの現状説明】

5-1	・本学部は、理系・文系・医系・法律系の学際性を活かし、人間を取り巻く社会経済システムをも学びの対象とし、失われていく自然や相互扶助的な人間関係の修復に取り組むことが可能である。持続可能な社会の形成を課題とし、人間の生存環境に関わるエコシステムと社会経済システムを重ね合わせて探究する人間環境科学は、時代のニーズと思われる。 ・アドミッション・ポリシーで求める学生像や修得すべき知識等を明示している。 1. 環境創造学を学ぶのに十分な基礎学力、とりわけ社会科・理科・英語の基礎力を有する人 2. 地球規模の環境問題、現代の社会経済システムに関心を持つ人 3. 複合的な視野から実践的・理論的に環境問題や生活問題に取り組もうとする人 4. 現場主義に立って国内外で学ぼうとする意欲を持つ人 障がいのある学生の受入れについては、全学の方針に則って対処している。
5-2	学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に学生募集および入学選抜を行っている。
5-3	・2014 年度、収容定員に対する在籍学生数比率が 1.10、入学定員に対する入学生数が 1.12 となっており、各学科平均によりやや低い状態であった。 ・2012 年度の学生募集力は、受入れ予定数に対して 87%と 9 割を切り、厳しい状況であった。一般入試も落ち込みが著しく、留学生志願者も減少した。そこで、2013 年 4 月に入試等学部戦略委員会を設置して入試改革を積極的に行った。具体的には「学科説明資料とゼミ紹介を主眼とした学部説明冊子」を 90 部手作りで製作し、夏季に 50 校の高校と 8 校の日本語学校をリクルートし、学部の魅力をアピールした。その結果、自己推薦入試受験者は倍増し、オープンキャンパス参加者も増加し、結果的には、志願者が増加した。留学生入試は、前期 3 名、後期 4 名、合計 7 名が入学し、日本語能力の比較的高い留学生が入学している。指定校の見直しとともに、学科説明冊子が効果をもたらしていることから教員全員の協力を仰ぎ、2014 年度は 200 部程度を作成する予定である。入学前教育も実施し、関係性を密にしている。
5-4	入試戦略の責任主体に関しては、学部長・学科主任を支援する組織として「入試等学部戦略委員会」(9 名)を置き、委員長がこれを統括し、さらに教授会の審議事項として行っている。

【効果が上がっている事項】

5-1	高校訪問によってアドミッション・ポリシーを明確にし、環境創造学への理解は広まっている。
5-2	学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に学生募集および入学選抜を行っている。 留学生に関しては、中国だけに限定せず、広くアジア地域からの真面目な将来性のある留学生を受け入れることが教授会で承認され、非漢字圏の留学生をも受け入れる体制を設けた。全学共通科目の日本語教育科目を確認し、さらに進路指導などの留学生のキャリア支援について講演会を開催した。留学生入試・推薦制度については、前期だけでなく後期も実施した結果、日本語能力が比較的高い留学生が入学した。
5-3	2013 年度は、入試等学部戦略委員会を設置し、学科紹介冊子を作成し、夏休み中、50 以上の高校を訪問した成果を相互に確認した。全国 450 校の日本語学校から実績と評判を調査し、8 校の日本語学校を厳選し、それぞれ数回訪問し、信頼関係を築きながら学部としては初めての留学生の推薦入試を実施した。推薦条件は、学校長の推薦、95%以上の出席状況、日留試 250 点以上（非漢字圏の場合は 220 点以上）とした。特に後期入試が、日本語留学生試験の日程と相まって効果的である。 ・上記の状態を受けて、学部の入試戦略委員会は、学部紹介のパンフの作成の他に、今年度の夏に高校訪問を各教員に促した

	結果、全体として来年度入学希望者数は、500 人から 750 人となり、250 人の増加となった。 ・定員 165 名に対して 750 名の志願者（736 名の受験者）があり、569 名の合格者の内、190 名が手続きをした。（辞退者 6 名）。その結果、受入数 197 名に対して入学者数は 184 名となった。受入数に対する比率は 93%であり、定員数に対する比率は 112%で、過不足は—13 名であった。一般入試の倍率は 1.7 倍となった。
5-4	

【改善すべき事項】

5-1	社会人、外国人学生、障がいのある学生など多様な学生の受入方針を定める必要がある。
5-2	2014 年度も、精力的に入試戦略活動に力を入れる。
5-3	・本学部の研究目標である人間環境と環境学に関連する学問は社会的ニーズが高いはずであり、社会人や留学生への PR をもっと考慮すべきである。 ・特に学部紹介のパンフの作成に当たっては、全教員の協力が必要である。
5-4	定期的な実施を検討する余地がある。

本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

『履修の手引き』、『環境創造学部の紹介』（緑の A3 版パンフ）、教授会議事録

《指標データ》

大学基礎データ（表 3）学部・学科、大学院研究科、専門職大学院の志願者・合格者・入学者の推移

（表 4）学部・学科、大学院研究科、専門職大学院等の学生定員及び在籍学生数

データ集（表 2 4）入試各種データ

Ⅲ 【達成目標】目標の進捗状況は、「S：完全に達成」「A：概ね達成」「B：やや不十分」「C：不十分」で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの		評価				
				2014	2015	2016	2017	2018
中期目標 (2014～ 2018)	5-1 障がい学生の受入方針を定める。	障がい学生の受入れ方針が定めてある。	→					
	5-3 収容定員超過率および入学定員超過率を適正な範囲に保つ。	収容定員超過率および入学定員超過率を適正な範囲に保っている。	→					
14 年度 目標	5-3 収容定員超過率および入学定員超過率を適正な範囲に保つ。	入学定員に対する在籍者数比率	→	S				
	5-2 留学生の指定校入試を 2013 年度は 8 校であったが、日本語学校の訪問と調査によって増やすことを検討する。	留学生の入学者が 7 名から 10 名以上になる。	→	S				
	5-2 教員全員の協力による学科紹介冊子を作成する。	教員全員の協力による学科紹介冊子が発行される。	→	S				